

日本には、風呂敷という便利な布があります。風呂敷は見たところただの布ですが、どんなものでも包めるのが特徴です。スイカや一升瓶など様々なものを包み、安全に運ぶことが出来ます。以前テレビ番組で風呂敷の特集をやっていた際、海外の方がしきりにこの風呂敷のことを褒めていたのが印象に残りました。そのことから私は、日本の文化が海外でどのような評価をされているのか気になるようになりました。色々調べてみたところ、ある雑誌で、興味深い記事を見つけました。それは少し前の話になるのですが、シベリアに上がった花火についての記事でした。

長岡の花火大会を支える、伝説の花火師の嘉瀬誠次さん。彼の作り出す雪のように白い花火は、その独特の色彩感が評判を呼び、テレビでも特集番組が組まれるほど、魅力的なものでした。

そんな嘉瀬さんは、第二次世界大戦でソ連との戦闘に巻き込まれ、千島列島で戦友を何人も亡くしました。終戦後もシベリアに抑留され、強制労働をさせられます。しばらくして日本に帰ってきたあとも、彼は、死んだ戦友のことが気にかかってなりません。いつしか「帰ってこられなかった仲間のために、シベリアのアムール川で弔いの花火を上げたい、いや、上げなければならぬ」という強い責務に駆られるようになりました。早速実現に向けての準備に入りますが、花火を上げるまでには、多くの苦勞、難問が待ち受けていました。

一年以上に及ぶ大使館や現地での折衝を重ねた末、嘉瀬さんは、シベリアの夜空に、とうとう思いを込めた三千発もの花火を打ち上げることに成功しました。

そして、一連の花火の最後を飾ったのは「白菊」と名付けられた真っ白な花火でした。白菊は古くからお供えの花として大事にされてきた花で、白一色の雪のように純粋で美しい、

真つ白な花火でした。打ち上げた嘉瀬さんの深い鎮魂の思いが詰まっていたいました。

その吊いの花火は、「素晴らしかった」「ありがとう」と次々に声をかけられるほど、現地の人から絶賛されました。

一瞬にして散ってしまう花火、その残像をいかに人々の心に留めるか、ずっと研究を重ね、火薬や色にもこだわり続けてきた嘉瀬さんの情熱と、友の吊いのために、というひたむきな思いが、現地の人々には感動として深く伝わったのです。

日本に住む私たちの身の回りには、ふと気づくと、長い伝統の中で培われた職人の技と工夫と、それによって作られた繊細で美しい工芸品が溢れています。桜や椿の花を巧みに表現するあでやかな和服や、どんな形のものも包める風呂敷を魔法のようだと、海外の人を魅了します。

なのに、私たちはこの毎日の便利な生活の中で、この魅力的な素晴らしい文化に囲まれているにも関わらず、日本の文

化の奥深さを本当に知ろうなどと特別意識することもなく、当たり前前にあるものとして無意識、無自覚に過ごしてしまっていました。そんな日頃の現実の姿を、今更ながらに海外の人の評価を通してはっと気づかされた思いがします。

空を彩る花火に打ち上げる花火師の思いがあるように、暮らしを彩る身の回りの品々にも、職人の技と心が息づいているはずです。自分には直接関係ないと無関心でいる心の在り方をちよつとだけ変えて、日々起こる些細な出来事や物事に對して、その奥を探ろうと思いを馳せてみることに。それは、私たちにとってとても大切なことではないでしょうか。普段何気なく過ごしてきたものを見るまなざしを少し変えてみることで、代り映えのない日常の暮らしに潜んでいる楽しさや美しさが鮮やかに蘇り、豊かで奥深いものが見えてくるような気がします。

私は、今まで自分以外のことには無関心を装って、広く周

困ることに向けようと思うことがあまりありませんでした。

しかし、これからは、少し眼差しを変えて少しでも物事の奥を探ろうと努めていきたいと思います。それがやがて、自分のこれからの人生に彩りを与えることのきっかけになると信じています。